

末筆ながら本訳書に関して一言すれば、何人も先ず工夫の凝らされた日本語の出来栄に一驚せずにはいられまい。ただ *passior, pâtre*. は場合によっては「蒙<sup>ハクイン</sup>むる」くらいの広い意味にとった方がよいと思われる(162—172頁)。いずれにせよ「あとがき」は最良の書評であり、全体として本訳書は、中世研究の枠を突破した、ものを考える上での絶好の原作品をもの見事に日本語に刻みとり、われわれの許に贈り届けている。

なお、本訳書(つまり、本書の日本語版)は著者の意向にもとづき、そのフランス語原稿によってなされたものであり、本書のフランス語版, *Émilie Zum Brunn et Alain de Libera, Maître Eckhart, Métaphysique du Verbe et théologie négative*, Bibliothèque des Archives de Philosophie, Nouvelle Série 42, Beauchesne, Paris, 1984, pp. 249. と並行出版の形式をとっていることを付記しておく。

Alois M. Haas, Heinrich Stirnimann (Hrsg.):  
*Das <einig Ein>. Studien zu Theorie und Sprache  
der deutschen Mystik.*

Freiburg (Schweiz), Universitätsverlag, 1980, 454 S.

小田川方子

この書『〈唯一なる〉。ドイツ神秘主義の理論と言語についての研究』は、最近西欧で再び注目を集めているドイツ神秘主義に関する神学者、哲学者、独文学者、言語学者たちによる学際的な研究である。これはスイスのフライブルク大学の教会合同研究所での「宗教経験の独創性」についての研究ゼミナールでの諸研究から発展し、本としてまとめられたものである。

両編者による序文で、まず、このゼミナールで参加者たちの関心が自発的にドイ

ツ神秘主義に集中したこと、この共通なテーマについて活気ある緊張にみちた思想の交換がなされたこと、またこのテーマに対しては、距離をおいた「客観的な態度」はもともと許されなかったことが述べられている。これとの関連で、神秘主義に向かう場合の研究態度について、次のように記されている。すべての神秘主義は、知的な能力と方法的に確実な追跡とによりそれに接近することを禁止する非妥協的な要素を有し、観察者から同一化のバトスを要求する。なぜなら、*unio mystica*（神秘的合一）の過程において神と人間との類似化は、似たものは似たものによってのみ認識されるという原理の実現によってのみ可能だからである。この古代ギリシャの形而上学の古い原則は、エンペドクレスに由来し、すべての時代と国との神秘主義においてくり返し多かれ少なかれ現存するものであるが、それは、キリスト教の変形において、人間が〈唯一なる一者〉（*das Einig-Eine*）に対面するために、ただ〈我々の内なる一者〉（*das Eine in uns*）自身をこのものに委ねることを要求する。またはプロティノスの言葉（また全く似たゲーテの言葉）を以てすれば、「神と美とを観ようとするならば、まず神と似たものとなり美しくならねばならない」（*Plot. I. 6, 9*）ということである。編者は、この書のすべての執筆者たちが、かかる要求に対する熱狂と、ここで論じられる神秘主義者たちによるこの要求の実現に対する驚嘆とを経験したに違いないとする。

この書では、ドイツ神秘主義の最も重要な代表者たちとして、まず Meister Eckhart が、次いで Johannes Tauler と Heinrich Seuse が扱われ、さらに、ルターによって高く評価された匿名の著者による「ドイツ神学」が論じられる。最後にオランダ神秘主義者 Jan van Ruusbroec が考察される。論文は全部で9篇あるが、私はその中から、哲学的問題を扱ったものとして、以下の4篇を紹介したい。

a) 「マイスター・エックハルト：思惟と存在と生命の統一としての真正な経験」（11—61頁）において、Dietmar Mieth は経験と思考との間の緊張した関係を考察する。Miethによれば、経験は思考過程に属し、他方思考過程には実存的要素が帰属すべきである。マイスター・エックハルトは決していわゆる神秘的経験については語らない、しかし常にそこから思考し語っている。かれはもっとも深い信仰を表現する場合に哲学する。時折の例外を除けば、かれは思考の言語以外のいかなる言語も有しない。ではかかるエックハルトの立場は、「神秘的」と特徴づけられるで

あろうか。かれの哲学的・神学的思想が「神秘主義」と呼ばれうるのは、かれの合一の経験が「啓示の神秘」と密接に結びついているという理由だけからである。

神秘主義の概念に光を当て、それを鋭く浮彫りにすることと並んで、Miethは、エックハルトにおける実践の新しいエトスの視点を叙述する。このエトスは理論のエトスを含み、存在論へと変容される。従ってエックハルトにおいては、存在論と倫理学は区別されない。それは「放下」(Gelassenheit)、「突破」(Durchbruch)、「変形」(Transformation)および「神の誕生」(Gottesgeburt)を通じて、われわれ自身の神的な根拠への帰還を要求する。「突破」と「変形」において知と愛とは結合され、実践はその根拠へと至るのである。

b) 「マイスター・エックハルトの神秘主義。比較研究」(63—86頁)という論文で、Fernand Brunnerは、西洋と東洋との両領域についての広汎な知識を駆使して、エックハルトと新プラトン主義およびインドの神秘主義の構造的な比較を試みている。かれのエックハルトとプロティノスとについての熟考は、とりわけ、自己から逃れそれへと還帰すること、自己自身の超越的な根拠を見出し、それと一つになることという問題に集中している。これらの問題は、神、一者ないしブラフマンと世界との関係と結びつけられる。インドの領域からの比較の対象として、Brunnerは主にジャンカラとかれの反対者ラーマーニュジャとを取り上げ、それぞれ「一元論的」神秘主義と「有神論的」神秘主義とを代表するものとして考察している。

c) 「神秘主義と隠喩。ゾイゼの対話について」(209—280頁)で、編者の一人であるHeinrich Stirnimannは、他の諸論文で多かれ少なかれ触れられている問題、すなわち言語と神秘的経験との関係を正面から扱い、それをゾイゼの対話において考察する。独白と報告とがゾイゼにとって神秘的なことばの基本的な形式である。かれの著作は特に神秘的な隠喩に富んでおり、それは推論的なことばによる神的存在の表現不可能性への「詩的」反応である。これら隠喩の源泉はしかし、神自身の超越というより、キリスト者の信仰、特に十字架の歴史的次元である。Stirnimannは比喩(Bild)、直喩(Gleichnis)、隠喩(Metapher)の分析によって、ゾイゼの最も偉大な業績は「比喩の世界」にあるとするBruno Boeschの主張を確認する。この分析はまた哲学、言語論理学、神学における神秘的なことばの基礎を明らかにする。それによって、神秘的な経験とそれについての言語とは二者択一的に分離す

ることができないことが示される。

d) 「〈ドイツ神学〉ある神秘論的テキストの構造」(369—415頁) はもう一人の編者 Alois M. Haas によるものである。かれは数多い出版物によって神秘主義とそれの言語およびその理論的基礎に関する卓越した権威として知られている。著書に『Nim din selbes war. マイスター・エックハルト, タウラー, ゾイゼにおける自己認識の学説についての研究』(1971), 『Sermo mysticus. ドイツ神秘主義の神学と言語についての研究』(1979) 等がある。この論文で Haas は〈ドイツ神学〉(Theologia Deutsch) の目標と文学的形式とについての根拠ある省察を呈示する。特に重要なのは、第一人称(語る「自我」)の使用法, それと結びついた意志の特殊な概念, および匿名の(フランクフルトの)著者による合一の理解に関する Haas の意見である。それらはまたドイツ神学全体のテーマ, つまりキリストの光における恵みの内部での人間の「神化」(deificatio) のテーマについての多くの視点を開くことになる。また Haas の詳細な注は, ドイツ神学と中世の神秘的な伝統との間の密接な関係を明らかにする。なお1980年にかれはドイツ神秘主義の概略ともいうべきこの「ドイツ神学」を Johannes Verlag (Einsiedeln) より, 非常に読み易い翻訳にして出版している。

以上の哲学的な論文のほかに, 次のような5篇の論文が収められている。

Richard Friedli: 「〈大死〉と〈大悲〉。キリスト者と日本の仏教徒とのエックハルトについての会話における翻訳の問題に関する文化人類学的注釈」

Wolfram Malte Fues: Unio in quantum spes: エルンスト・プロッホにおけるマイスター・エックハルト」

Louise Gnädinger: 「深淵が深淵を呼ぶ。タウラーの説教 Beati oculi (V45)」

Paul Michel: 「神的言葉のしもべとしてのハインリッヒ・ゾイゼ。かれの聖職者としての勤務における聖書の引用の使用の際の説得的戦略」

Jef Boeckmans: 「意識過程としての, また愛の共同体としての神秘主義。Ruusbroec における自然的神秘主義の問題について」

ところで「神秘主義」という言葉は, 現在の高度に発達した技術社会の合理性のもつさまざまな問題に対する反省から, わが国でも最近大きな関心を引きつつある。しかし大部分の人々がこの言葉で理解していることがらは, 西欧の神秘主義の

伝統をなすものとは全く異なったものであることを、この書は明示している。「神秘主義」は本来決して非合理主義ではないのである。

この書は、中世末期の精神的に最も重要な現象の一つを、原典に即して研究し、そこから慎重に、神秘主義の確かな特質を引き出している。神秘主義において、反省的思考、概念や言語を通じての熟考は、実存的なあり方、つまりいわゆる神秘的経験の不可欠な条件であり、それと密接に結びついている。概念的思考は、その限界に至るまで遂行された時、それ自身を超越し、もはや思考の働かない神秘的合一という究極の目標に到達する。絶対的な「唯一なる一」に向かって進む人間精神の運動をドイツ神秘主義の諸相において明らかにするこの書は、今日のわれわれに一つの確実な道標を与えているように思われる。

John F. Wippel: *Metaphysical Themes in Thomas Aquinas.*

The Catholic University of America Press, 1984 pp. xii + 293.

稲垣良典

本書はウィップル神父がこれまでに発表した論文のうち、トマスの形而上学思想に関するものを集め(13世紀後期の形而上学思想に関する諸論文は別に刊行の予定)、それに書き下しの章(第5、6章)を加えた10章から構成されている。著者は現在、アメリカ・カトリック大学の哲学部正教授であり、北アメリカにおける最も著名な中世哲学研究者の一人である。なお著者が同じ大学出版部から1981年に出版した *The Metaphysical Thought of Godfrey of Fontaines: A Study in Late Thirteenth Century* (ベルギー、ルーヴェン大学 *Maitre Agrégé* を取得した労作) は13世紀後期スコラ哲学に関する最近の重要な研究の一つである。

第1章「トマス・アキナスとキリスト教的哲学の問題」において、著者は20世紀におけるトマスないしスコラ哲学研究の特色の一つは、スコラ哲学者たちが神学